大会発表研究論文　2011 Convention Research Paper

設置位置からみたヒンプンの機能

森　隆男*

The Function of *Hinpun* Based on Their Placement

Takao MORI

はじめに

南西諸島の住まいの特色のひとつであるヒンプンは、庭に設けられた独立した建造物であったこともあり、民俗学や建築学の研究対象からもれることが多かった。かつて南西諸島に濃厚に分布していたヒンプンは、現在離島の一部を除いて多くの地域で消滅しつつあるが、新築の住まいの庭で復活している地域もある。

ヒンプンの名称はメーガキ(前垣)やマイマーキなど多様である。沖縄本島で使用されているヒンプンが中国福建省の呼称である屏風(ピンフン)に似ている点から、福建省から沖縄へ伝播したといわれている①。当初は風水思想とともにもち込まれたようで、屋部憲右は「明堂の生気を収める案山の役目」が期待されていたのではないかと指摘している②。しかし現地で聞き書き調査をすると、「目隠し」、「魔除け」、「風除け」など設置の理由は多様である。

さて、南西諸島でヒンプンの調査をすすめる過程で、設置される位置が地域によって異なることに気づいた。位置が異なれば、期待される役割も異なるはずである。本稿ではヒンプンの設置位置に着目し、材料や形態にも留意しながら、ヒンプンの機能について検証する。

1　門・ヒンプン・主屋の位置

沖縄地方や八重山地方では、道路からみて門・ヒンプン・主屋が同一線上に並ぶ。これらの地方でみられるヒンプンの規模は、一般的に長さ3m、高さ1.5m、厚さは0.3mである。門の幅が広い旧家では長さが2倍程度になる場合もある。高さはほとんど同じであるが、厚さは材料によって異なり、テーブルサンゴを積み上げた事例では0.8m程度になる。いずれも道を行く人の視線から、主屋の二番座を中心に一番座から三番座までほぼ遮断することができる。二番座は日常生活の場であり、これを隠す「目隠し」の機能が期待されていることは明白であるが、聞き書き調査では、設置の目的が二番座に設置された仏壇を隠すためと説明されることが多い。久米島の旧家上江洲家や渡名喜島では、門とヒンプンの中心線と仏壇の中心をずらしており③、ここでは「悪魔返し」がヒンプンの重要な役割であるという。すなわち魔よけの機能である。目隠しと魔よけは住居空間を閉鎖することと直結した機能で、沖縄地方や八重山地方では一般的に聞かれる

写真1　門・ヒンプン・主屋が同一線上に並ぶ住まい(鳩間島)

それに対し奄美地方では、道路から門とヒンプン

写真２　門・ヒンプンの線上から主屋がずれる勝連家（喜界島）

をみたとき、その延長線上に主屋がない。主屋の位置がずれ、さらに主屋が門とヒンプンがつくる軸と向かい合う位置に建築される場合が多い。喜界島の白水地区にある勝連家は長さ5.5m、高さ２mの重厚なヒンプンが築かれているが、主屋の位置は門からみて右手に大きくずれている。同家は沖縄本島の勝連地区から移住してきた家といわれているが、ヒンプンの設置の仕方は奄美地方の伝統に従ったといえる。

それでは奄美地方のヒンプンは、何を期待して設置されたのであろうか。喜界島では東海岸地区は強風が吹く地域で、屋敷の周囲は石垣で囲まれている。とくに阿伝地区は石垣が創り出す景観の美しさで知られ、重要伝統的建造物群に選定されている。しかしヒンプンを設置しているのは、旧家を中心に一部の家だけである。一部の家で採用されたとすると、風除けという単なる物理的に必要な設備であったとは考えられない。奄美地方では比較的多くのヒンプンが分布する喜界島であるが、西海岸にはほとんどみられない。わずかに西海岸の赤連地区の旧家である得本家に、長さ約４m、高さ約1.6m、厚さ約0.5mの切り石を積み上げたヒンプンがみられる。1990年まではサンゴ石を積み上げたものであったという。当主の得本維宗氏（1911年生まれ）によると、この地区には100軒程度の家があるが、ヒンプンをもつ住まいは旧家の２件だけであった。強風が吹く向きを考慮すると風除けではないという。

後述する複数のヒンプンを設置する事例も旧家だけである。以上の検討から、奄美地方でヒンプンが設置された主たる理由は、家格を示すステイタスシンボルにあったと考えていいのではなかろうか。これについては第３節で再度検証したい。

２　門・ヒンプン・主屋の各々の間隔

門・ヒンプン・主屋が同一線上に並ぶ沖縄地方や八重山地方では、各々の間隔が多様である。一般的にはヒンプンを門の内側２m程度のところに設置しているところが多い。

国頭村安波地区には主屋の二番座と１mほどの間をあけてヒンプンを設置している住まいが目立つ。人がかろうじて通行できる0.6mの間隔しかない事例もある。主屋から離れた門の外側に設置している事例もある④。この地区ではヒンプンの設置場所は多様であるが、いずれも目隠しの役割を果たしている。

一方、ヒンプンと主屋の間に比較的広い空間を確

写真３　二番座のすぐ前に設置されたヒンプン（沖縄県国頭村安波）

保している地域がある。伊計島ではヒンプンと主屋の間に3m以上の間隔を確保している住まいが多い。棚原源一郎家の場合、門とヒンプンの間は2mであるが、ヒンプンと主屋の間は3.3mである。棚原氏によると盆のエイサー踊りをするために中庭を確保しているという。

八重山地方の鳩間島は過疎化が進み、小規模な集落に空き家が目立つ。約20戸のうち6戸にヒンプンが残存している。米盛勝家は周囲を石塀に囲まれた敷地に、寄棟トタン葺きの主屋が建てられている。門から主屋まで約12mあり、ほぼ中間の位置にヒンプンが設置されている。すなわちヒンプンから主屋まで5.8mあり、広い中庭がつくられている。サンゴ石を積み上げたヒンプンは長さ6.2m、高さ1.1m、厚さ0.65mである。ヒンプンの右側(方位は東側)を

写真4　祖先の霊アンガマを迎える広い庭
(鳩間島米盛家)

写真5　ヒンプンと主屋が創出する「前庭」は儀礼の場
(小浜島大嵩家)

通るのは、祝儀の際の男性に限られる。男性も日常は左側を通る。この島では毎年盆に村人が扮したアンガマ(祖先の霊)が来訪するが、彼らの一行はヒンプンの右側を通って中庭に入る。中庭の中央に筵を敷いて三線を弾く人が座り、その周囲をアンガマが踊りながら左回りに回る。

小浜島でも同様に「前庭」の広さを確保している。豊年祭の時にはアカマタ・クロマタと呼ばれる来訪神を迎えて祝福を受ける儀礼が行なわれる。盆には祖先の霊を慰めるために村人の一行が訪れ、マキオドリと呼ばれる芸能を奉納する。これらの儀礼を行なう場が、ヒンプンと主屋の間の前庭である。この島で最も古い住まいと思われる大嵩善立家の場合、門とヒンプンの間が2.8mであるのに対し、ヒンプンと主屋の間は6.1mである。

ヒンプンに儀礼の場を創出する役割が求められているとすると、そこには結界としての機能を認めることができよう。この点については後述する。そしてこれらの儀礼に参加する人たちの動線を決定するのがヒンプンであり、別稿で詳しく論じたところである⑤。

3　敷地の奥に設ける2点のヒンプン

奄美地方では、2点のヒンプンを設けている事例が上層の住まいで数例確認できる。正確にはヒンプンとヒンプン様の石塀である。ここでは喜界島の西海岸側の西目集落に建てられていた旧士族の事例を取りあげる。この住まいは現在廃墟になり、ウリガーと呼ばれるらせん状に掘った井戸が喜界町の指定文化財として残っている。幸い竹内譲がかつての屋敷図を残しており⑥、それをもとに検証しよう。

図のように約700坪の屋敷の北側を除く三方は石塀で囲まれ、南側に漏斗型の門が設けられている。門を入ると右側に長く石塀が延び、約10m奥の突き当たりにL字型のヒンプンが築かれている。また左側には右側の石塀と平行に、L字型のヒンプン様の

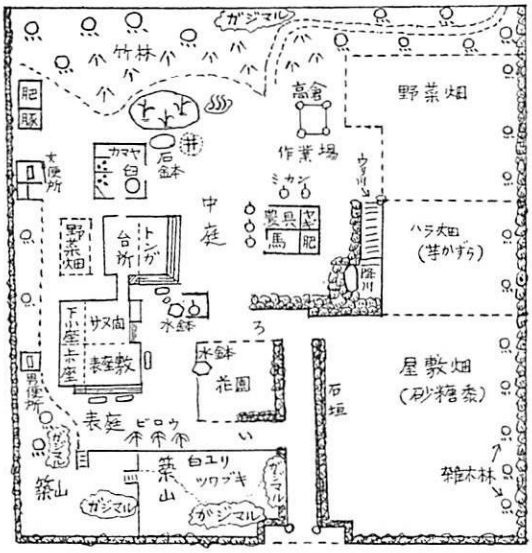

図　2点のヒンプンが設置された旧士族の住まい
(竹内譲『喜界島の民俗』)

石塀が設置されている。このヒンプン様の石塀の手前の開口部を進むと、表庭を経て客間のオモテ座敷に導かれる。この出入り口を使用するのは高級役人と嫁の初入り、盆に来訪する祖先の霊、そして棺である。奥側すなわち突き当たりのヒンプンとの間に開いた開口部を進むとサヌマと呼ばれる居間に至る。サヌマとは「下の間」の意味である。この出入り口を使用するのは、家族や一般の客である。さらに女性客や親しい人は、中庭を経て台所に出入りする。

また東海岸の志戸桶地区にある旧秋山家にも2点のヒンプンが設置されている。窪徳忠によると、主屋に向かって右側の出入り口は高級な武士が、中央の出入り口は当主の賓客が、左側の出入り口は家族や一般人が使用したという⑦。

このように2点のヒンプンが3通りの出入り口を創り出していることになり、これは奄美地方の特色であろう。なお動線を決定する機能は主屋の前庭で芸能を奉納する沖縄地方や八重山地方の事例とも共通する。窪はこのような機能に対し否定的であるが、南西諸島の全域でみられることから軽視することは

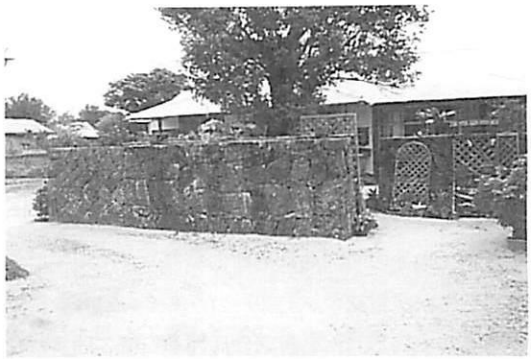

写真6　2点のヒンプンが設置された旧秋山家
(鹿児島県喜界島)

できない。とくに沖縄地方や八重山地方では階層を問わず確認することができ、伝統的な習俗との関わりの中で生まれた重要な機能といってもいいだろう。

さて奄美地方の旧家では、前出のように門から隔たった敷地の奥にヒンプンが設置される。これは沖縄や八重山地方で、門をふさぐように門近くに設置しているのと対照的である。奄美大島の笠利町にある泉家(重要文化財)では、門から約10m入ったところに高さ0.8m、長さ6mの生垣を設けてヒンプンとしている。高さから判断して目隠しではない。同家の場合、敷地内に同様の生垣が多くつくられており、来訪者の動線になっていることは確かである。

このような位置にヒンプンを設置する目的は、来訪者に敷地の奥行きの深さをイメージさせることで

写真7　門から約10m奥に入ったところに設置されたヒンプン(喜界島)

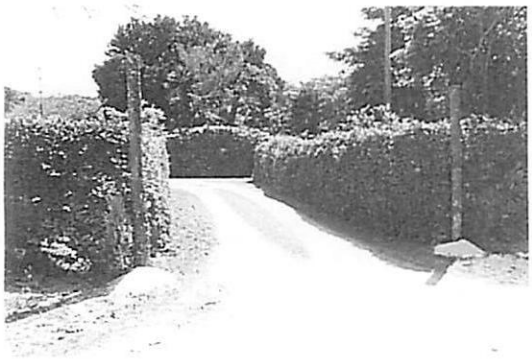

写真８　ヒンプンの設置位置が奥行きの深さをイメージさせる旧士族の家（喜界島）

家格を示すことにあるのではなかろうか。喜界島では門の深い住まいが尊重されたという指摘もある⑧。

なお鹿児島県南九州市知覧町の武家屋敷にもヒンプンをみることができる。薩摩藩は領地を区分し、それぞれに「麓」とよばれる武家集落をつくった。知覧町は麓の典型的な事例で、重要伝統的建造物群に選定され、詳細な報告書が刊行されている⑨。公開されている武家屋敷７軒は優れた意匠の庭園が注目されているが、３軒に単独のヒンプン、残り４軒を含む未公開の屋敷に塀と連続したＬ字方のヒンプンが認められた。

佐多直忠家には切石で作られた単独のヒンプンが設置されている。上方の長さ3.2m、下方の長さ3.3m、高さ1.7m、上方の0.6m、下方の厚さ0.8mの

写真９　佐多直忠家のヒンプン（鹿児島県南九州市知覧町）

写真10　ヒンプンの前を左に折れて主屋の庭園へ（佐多直忠家）

台形である。設置されている位置は門から約８m奥に入ったところで、そこから約10m奥に主屋が建てられている。

森重堅家のヒンプンも単独で、門から約12m敷地の奥に入ったところに設置されており、そこから主屋の式台まで約10mの距離がある。当家のヒンプンは長さ３m、高さ1.8m、厚さ0.23mの切石製である。これらの切石は南九州市教育委員会学芸員の新地浩一郎氏によると、この地を流れる麓川の上流に産するという。

佐多民子家のヒンプンはＬ字型で、やはり門から約10m入ったところに設置されている。

加世田市にも知覧と同様に麓の武家集落が残っている。ここにも単独型やＬ字型のヒンプンがみられる。

写真11　森重堅家のヒンプン（知覧町）

写真12　麓の武家住宅に残るヒンプン
（鹿児島県加世田市）

知覧町や加世田市にはヒンプンのほかに石敢当もみられ、これらの琉球文化は、知覧町が近世の琉球貿易の拠点であったことに関係があると説明されている⑩。しかしヒンプンの形態や位置は沖縄地方ではなく奄美地方と酷似している。いずれも門から数m以上奥まったところに設置されている。知覧町や加世田市の事例も奄美地方と同様に、敷地の奥行きの深さをイメージさせるための装置といえよう。これは、1609年（慶長14）以降、島津藩の支配下になった奄美地方から伝播した文化の一つであろう。一方、住まいの奥行きを強調する背景には、日本の武家住宅で重視されたカミーシモの秩序、すなわち入り口からみて奥の空間を上席とする観念が反映している可能性がある。この場合は薩摩から奄美地方へ伝播した文化ということになろう。いずれにしても中国から伝来したヒンプンの文化が、沖縄地方を経て奄美地方に伝播する過程で新しい展開をした様子をうかがうことができる。

4　住まいの開閉装置

ヒンプンの形態や材料からも役割を知ることが可能である。1960年頃まで、旧家はサンゴ石や切石を積み上げた大型のヒンプンを、一般の住まいでは竹製のヒンプンを設けていたことを聞き書き調査からから知ることができる。その後1960年代に入るとコンクリートブロック製が普及し、さらに30年ほど前から生垣のヒンプンが増加してきた。樹種は低木の常緑樹であるが、仏桑華（ハイビスカス）など美しい花を咲かせるものが目立ち、装飾的な要素も加味されているようである。生垣のヒンプンは目隠しと防風の役割は期待できるが、魔よけの役割をもつとみるのは困難であろう。移動が可能な板製のヒンプンも増加している。1966年に刊行された『伊是名村誌』に「移動式に改善された」ヒンプンが登場したとの記述があり⑪、半世紀前には変容が始まったと考えられる。これは台風が来襲すれば移動するもので、目隠しが主たる役割になっている。材料や形態の変容は、ヒンプンに期待する役割の変容でもある。

また渡名喜島などでは１本の低木をヒンプンにしている事例がある。喜界島の小野津地区では高さ0.8mの石のヒンプンをみる機会があった。この高さでは目隠しの役割を果たしているとはいえない。重厚な石塀やブロック製のように物理的に有効なヒンプンから象徴的なヒンプンに変容する傾向が認められる。

このようにヒンプンの役割は複合し、さらに変容しているが、石塀で囲まれた敷地の中でみるとき、結界としての機能は喪失していないといえる。伊是名島ではすでに多くのヒンプンが消滅しているが、聖地である拝所の前には依然としてテーブルサンゴの石を積み上げたヒンプンが残存している。

写真13　象徴的なヒンプン・ハイビスカス（渡名喜島）

写真14　結界の機能をもつ拝所前のヒンプン(伊是名島)

結界としてのヒンプンが有効に機能しているのは沖縄地方や八重山地方で、前庭を儀礼の場にしている地域である。ヒンプンが住居空間を分割し、あいまいな空間である中庭を創出している。ここが盆や豊年祭の儀礼の場になっている。そしてこれらの地域では今なおヒンプンが濃厚に分布している。

鳩間島では悪霊の侵入を防ぎ、良い神霊だけを住まいに入れるのがヒンプンの役割であるという。ヒンプンは屋敷の周囲にめぐらされた石塀と連続する、住まいを閉じる装置である。しかしヒンプンの両端から出入りすることができ、門扉のように常に閉じる役割を果たしているわけではない。実際に住まいの中にいる人にとって、目隠しにはなっても道行く人の足音や、訪れた人の気配を察することができる。この曖昧さが、住居空間の開口部を閉じながら一方で来訪神のために開くという矛盾を解決しているといえる。

5　むすび

中国から伝来したヒンプンは、当初外からの殺気を遮断する、完全な結界としての機能をもつ設備であった。すなわち住居空間を閉鎖する機能である。しかし南西諸島において伝統文化と関わる過程で住居空間を閉鎖しながら、必要に応じて開くという開閉装置に変容していった。さらに奄美地方や薩摩地方では、家格を示すステイタスシンボルとして採用されたと考えられる。これらはヒンプンの日本的展開といえよう。

本研究は、平成22～23年度関西大学学術研究助成基金(共同研究)において研究課題「八重山地方の文化的特性に関する研究」(代表者　森隆男)、及び文部科学省科学研究費助成金において研究課題「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」(代表者　野間晴雄)として研究費を受けたものの成果として公表するものである。

① 窪徳忠『中国文化と南島』 p. 53　第一書房　1981
② 尾部憲右「上江洲家住宅の風水空間－仏壇とその周辺の比較－」『久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究』 p. 154　1999
③ 前掲②　p. 155、『渡名喜村史』下巻　p. 104　1983
④ 森隆男『住居空間の祭祀と儀礼』 p. 140　岩田書院　1996
⑤ 森隆男「住まいの変容と伝統儀礼－沖縄県小浜島のヒンプンを中心に－」『関西大学東西学術研究所紀要』第44輯　2011
⑥ 竹内譲『喜界島の民俗』 p. 36　黒潮文化会　1969
⑦ 前掲①　p. 71
⑧ 前掲⑥　p. 38
⑨ 知覧町教育委員会『知覧町武家屋敷群－伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書(改訂版)』 1993
⑩ 『薩摩の小京都　知覧の庭園』知覧武家屋敷庭園有限責任事業組合発行
⑪ 『伊是名村誌』 p. 250　1966

＊関西大学文学部教授